

「和装文化論」授業における工夫について

石田 かおり*

Pedagogical Techniques in the Lecture of Kimono Culture

Kaori ISHIDA*

Abstract

The education purpose of the Faculty of Human Relation of Komazawa Women's University is brought up holistic human capacity, especially social one. The top priority for this purpose we have been tried to students acquire high ability of social communication, which has been most required by modern business society. The typical case is job hunting. Communication is constructed two parts, one is verbal communication and the other is non-verbal communication. Non-verbal communication is, for example, behavior, how to speak, clothes and make-up. "The lecture of kimono culture" aims to acquire the ability of non-verbal communication. At the same time the lecture aims to deepen the knowledge of Japanese culture by learning Kimono. Recently Japanese students have little experience watching and wearing Kimono. They have almost no knowledge about Kimono. For such students I have been tried by many ways as pedagogical device. Now we will try to consider the ways of teaching and to inspect of the effects.

1 授業開始の動機と授業の目的

和服が日本人の生活の中から姿を消して久しい。駒沢女子大学で授業を始めてから毎年学生にアンケートを取ってきた回答によると、大学生女子がそれまでの人生で和服を着た経験は七五三と成人式だけという回答が圧倒的多数である。その他は、浴衣を1～2回家族などの自分以外の人に着せてもらったことがあるという回答がたまに見られる。一着も和服がない家庭はまだ少数派であるが、その和服を一度も出して着たことがない、あるいは家族が着たのを見たことがないという人が多数を占めているのが実情であろう。和服が消えたのは生活

の中だけではない。街中で和服姿を見かけることも近年大幅に減った。成人式・七五三・卒業式(主として大学・短大などの女子の袴姿)といった一生に一度の特別な行事のための特別な衣装を除けば、週に1名以上見かける時期は正月と初釜の頃くらいではないか。

和服が身の回りからなくなることで、和服に対する知識が「特別な」知識になってしまった。和服を着た人を見れば「和服を着ている」ということはわかって、それがどのようなものか、たとえば夏物か合の物か冬物か、どのような場にふさわしいものかなど、わからない状況である。和服には季節や場面よる厳密なルールが存在することも、ほとんど知

*人文学部 人間関係学科

られていない。現在では大人の浴衣の柄に桜や椿などの夏以外の季節を意味する植物が使われ、赤・橙・桃色などの暖色が当然のように使われているが、涼を求める浴衣に季節外れの柄と涼しさから縁遠い色彩は使わないルールがかつて存在したことも、いまや和服に詳しい人にしか知られていない。浴衣姿で電車に乗って1時間程度かかる場所に外出したり、レストランなどの飲食店で食事をしたり、展覧会や遊園地、イベント会場などに出向くことも、伝統的な和服のドレスコードでは考えられないことであるが、今では当たり前になっている。

社会の変化に応じてドレスコードが変わるのは文化の流れとして当然のことではあるが、伝統的な衣装には変化してよい点と変化してはいけない点があるのではないか。また、日本人が民族衣装である和服についての知識をまったく持たず、また知識の伝承が途絶えてしまうことは、問題がないとは言えないだろう。

和服に親しむ環境で育った筆者が、かつて駒沢女子大学の新設学科である人間関係学科の専任教員として着任するときに、どのような授業内容にするか考えた際、化粧と服飾のきわめて密接な関係性ゆえに和服を用いた授業ができないかと考え、新設学科の専門科目が開講する初年度である2001年度からこの授業を始めた。その内容は、和服の基礎知識を身に付け、和服を自分で着て体を動かすことで、日本の伝統的な身体技法を身体感覚で実感するものあり、こうしたことを通じて履修者の人生に資することを目的としている。その科目はこれまで次のような科目名で開講してきた。古い順に、「ライフスタイル論I・II」、「服装と文化I・II」、「服装と文化」（前期）と「服装と文化実習」（後期）、「和装文化論I・II」である。駒沢女子大学では同じ科目名にIとIIがある場合、原則としてIは前期、IIは後期の科目である。

授業についての具体的な目的と内容の補足説明として、現行のシラバスの一部を以下に引用する。

なお、シラバス文面中の「きれいを学問する」は筆者がすべての授業を貫くコンセプトとして掲げているものである。

前期

「きれいを学問する」という大テーマの下、出席者が自分自身の「きれい」を考え創造する際の視点獲得をめざして、教養と身体技法を身に付けるための授業を実践的に進める。

日本人の伝統的な衣服である和服を取り上げ、現在の日常的な衣服としての洋服と比較しながら服装と文化の関わりを考える。具体的には、和服の基礎知識と日本人の伝統的な美的感覚について、主として講義形式で学ぶ。「きもの文化検定」5級合格をめざした内容である。

後期

「きれいを学問する」の大テーマの下、出席者が自分自身の「きれい」を考え創造する際の視点獲得をめざして、教養と身体技法を身に付けるための授業を実践的に進める。

前期の授業内容を踏まえた上で、和服着用時の美しい身体技法と洋服着用時の美しい身体技法の異同を体験する動作実習型の授業。日常の動作のほかに美を強く意識しなければならぬ日本舞踊を体験することで、美しい身体技法を頭と体を使って考える。

人間関係学科ホームページ中の科目紹介には以下のような簡潔な表現を掲載中である。

着物1枚で、染・織・文様・家紋・ドレスコード・季節感など、日本人なら身につけておきたい教養と美意識が学べます。こうした「きもの文化検定」5級も受検できる講義の後、ひとりで着物を着て動く実習で、洋装と和装の動作の違いを実感しながら

礼と美を兼ね備えた立居振舞の獲得を目指します。

次に、この科目がなぜ人間関係学科に存在するのかについて、人間関係学科の教育目標等と照らし合わせて説明しよう。2012年度の改組によって、人間関係学科の科目やミッション等が改定された。しかし、それ以前と比較して、人間力を総合的に育成するという学科目標の根本的な部分は変わっていない。そこで、現行のものを下記に引用する。本学ホームページおよび大学案内冊子等の公式なパブリシティに記載されている人間関係学科の説明は以下の通りである。

●教育上の目的

人間関係学科は、人間の本質の学修を通して、人間と人間を取り巻く諸問題に主体的に立ち向かうことのできる人材の育成を目的とする。

●カリキュラムポリシー

人間関係学科は、「哲学や心理学、社会学、文化人類学など、人文諸科学の成果を総合的に修得し、コミュニケーションの観点からよりよい人間関係についての見識を深め、現代社会において生きるために必要な能力を有していること」を人材養成の目的として、カリキュラムを作成している。

博物館学芸員を取得するための授業科目を設定している。

具体的な学科の特徴と目的についての記載は次のようなものである。

職場で、地域で、家庭で、他者とともに生きる、自立した女性を目指して

●可能性をひろげ、輝くあなたをみつける4年間
人間関係学科は、「コミュニケーション」を切り口に「ビジネス」「社会」「文化」「メディア」「こ

ころ」「からだ」などを多角的に学ぶ、知のフィールドです。

社会生活のさまざまな場面で優れた人間関係（＝コミュニケーション）のスキルを発揮し、女性としての輝きを放ち、美しくしなやかに生きる力をはぐくみます。すなわち「社会人力」と「女子力」を兼ね備え、ビジネスでもプライベートでも頼りにされ、好感をもたれる人をめざした、学びの世界が、新しい人間関係学科です。

●広く深い教養と社会でいきるコミュニケーションスキル

人間関係に関する広く深い教養を身につけ、社会で役立つコミュニケーションの技法を磨きま

す。
複雑で大きな社会的問題から自分の身近な問題にいたるまで、私たちは、そのすべてに広い視野と深い洞察力をもつてのぞむ必要があります。そのためには専門的な知識に裏打ちされたしっかりとした教養が不可欠です。新しい人間関係学科では、社会のしくみ、伝統文化、人間心理のメカニズムなどの理論を学び、大学生としてふさわしい教養をはぐくみます。

この学びのなかで、コミュニケーションのための実践的なスキルの修得をめざします。真のコミュニケーション力とは、相手の語りに耳を傾け、相手の目線にたち、共有する言葉で語り、共感する「場」を作り、可能性を生み出す能力です。

言葉によるコミュニケーション技法だけでなく、心理的な側面から「共感」を生み出す統合的なコミュニケーション技法、化粧・服装・立居振舞などの身体表現によるコミュニケーション技法などを総合的に身につけ、社会のなかで役立ちます。

●これからの社会を創る、ポジティブな自画像
私たちの社会は、依然としてめまぐるしい変化を日々遂げています。これからは、とどまること

のないグローバル化の渦に巻き込まれながらも、しっかりとその明暗を認識できなくてはなりません。そして、これまで「経済的豊かさ」の裏側で見落とされがちであった自らの「足元」——ライフスタイル、地域、家庭、環境——を一人ひとりが見直さなくてはなりません。つまり、これまでとは異なる新しい価値観、新しい生き方を創造していく必要が生じるのです。新しい人間関係学科では、学びをとおして、次世代をいきるための活力を身につけます。講義形式の授業に加え、グループワーク形式の授業を多く行い、主体的に創造し、発信する能力、協働して生み出す能力を育てます。学びのなかで小さな達成感を積みあげ、ポジティブな自画像を描ける女性を育てます。

これから読み取ることのできる学科の教育理念とこの科目の関係について、簡潔に説明すると次のようになる。人間関係学科は人間力の育成が最大の目的であり、人間力を高めるためにコミュニケーションに重点を置いて学修できるよう科目を揃えている。コミュニケーションに重点を置く学部や学科は世間に少なからず存在しているが、駒沢女子大学の人間関係学科の大きな特徴は、言語やメディアによるコミュニケーションだけでなく、非言語コミュニケーション、とくに身体によるコミュニケーションの学修を充実させている点にある。具体的には、仕草、姿勢、服装、化粧など、多様な視点から学修できるようになっている。こうした科目の1つに「和装文化論」がある。

2 授業の概要

詳細はこの論文の末尾に掲載するシラバスを参照されたい。前期は和服の基礎知識の習得が事実上の内容となっている。日本の服飾史、和服の種類、格、紋、紋様、伝統色、染、織、季節による着分け、場面による着分け、和服の構造、浴

衣と半幅帯を用いての着る・たたむの実習である。後期の前半は和服の基礎知識の続きを実施する。帯、羽織・コートなどの羽織もの、帯揚・帯締・履物・足袋などの小物、子供の和服、男性の和服、雨の日の装い、下着、後始末の方法などを学修する。一通りの学修を終えた時点で「きもの文化検定」5級の模擬問題に挑戦させる。

後期の後半は、浴衣と半幅帯と足袋を着用して動作実習を実施する。立つ、座る、歩く、腰掛ける、車の乗り降り、階段の上り下り、お辞儀(略礼から扇子を用いたもっとも正式なものまで)、客人に招かれ家に上がって手土産を渡すときの客と亭主のロールプレイングなどの基本動作を実施した後、簡単な歌舞伎舞踊を1曲習得する。これらの動作実習を通じて和服着用時の動作や体性感覚と日頃の洋服着用時の動作や体性感覚を履修者各自の身体を使いながら比較検討する。

3 検定試験の利用

一般社団法人全日本きもの振興会が主催する「きもの文化検定」という和服の知識に関する検定試験が存在する。この検定試験を授業に利用している。その目的の第一は、学修意欲と動機を高めることである。授業の内容は「きもの文化検定」5級合格水準を目安に構成し、履修者にも授業を終えるときに5級合格程度の知識を身につけるよう促し、授業の中で度々「検定試験ではこれがよく出る」などの話をする。また、授業の中で模擬問題を解く体験をさせることをで、学生自らがどの程度知識が身についたか自覚できるようにもしている。

さらに、検定試験の利用には次のような動機が存在している。「きもの文化検定」は2006年に開始した。筆者は検定試験の存在を知った時期が遅かったため、初年度の受験を逸したが、翌2007年に4級に合格した。下は5級から上は1級まであり、初めて受験する場合は、5級または4級または5級と4級の同時受験のいずれかでないと受験す

ることができない制度になっている。5級と4級は同じ問題で実施し、合格最低点が異なる。100点満点で100問が出題され、5級は70点以上、4級は90点以上が合格である。公式テキストブックを購入して勉強し、さらには検定試験の実施団体が開催する「合格対策セミナー」と称する講習会を受講することを想定して試験が実施されている。筆者は受験を決意したときに公式テキストを購入したものの、仕事と家の用事に追われてほとんど目を通すことなく、ましてや受験のための勉強もしないまま受験当日を迎えてしまった。それでも合格点である90問以上正解したことは、生育環境の中で自然と身に着いた知識が正しいものであったことが証明されたと考えている。さらにこのことは、和服が生活環境に根付いていた時代には誰にとっても当たり前であった和服の知識が、現代社会では検定試験が成立するほどの特別な知識になったという先述の証左と言えるのではないだろうか。

筆者が「きもの文化検定」を受験した動機は、この授業の裏付けのためである。筆者の和服の知識は生育環境上「気づいたら身に着いていた」ものである。授業を行うに当たっては、文献等で裏を取ることできた確実な事柄しか扱っていないが、哲学と、応用哲学である哲学的方法による化粧や美容の研究が専門である筆者にとって、服飾はまったくの専門外であるばかりか、大学を始めとする教育機関で学修や研究をした経験が皆無である。学生に正しい知識の伝授ができたとしても、このような者が大学の授業を担当する資格があるのか自問する意識を払拭し切れずにいた筆者にとって、「きもの文化検定」の合格は、信頼でき第三者から授業を担当するお墨付きをいただいたようなものであった。

4 いきた知識獲得への工夫

(1) 教科書について

駒沢女子大学には「自前教科書」という制度がある。1回の授業の内容を1章として全部で15章

で構成するなど、授業にびたりと沿うような形で授業担当者が教科書を書き下ろし、授業担当者の自作の原稿をそのままオフセット印刷し、簡易製本したものである。さらに、この教科書は履修登録をした学生に無償配布される。大学の講義科目で教科書として使用されている書籍は、専門書という性質上、数千円という書籍としては比較的高価なものが少なからず存在する。こうした市販の専門書を教科書に用いた場合、必ずしも授業にびたりと沿うとは限らず、教科書を隅から隅まで利用するよりは部分的に利用することが多々見受けられる。こうしたことから、学生の立場からすればコストに見合わないという不満が以前から根強く存在していた。駒沢女子大学では、かつては「自主自立を目指した面倒見ある教育」、現在では「テイラーメイド教育」をモットーにしていることから、なるべく多くの科目で「自前教科書」を使用するよう教員に対して推奨している。ちなみに、自前教科書は他の教育上の工夫と組み合わせて2006年に文部科学省の「特色ある大学教育プログラム(特色GP)」に採択された。

こうしたことから、一般論とすればこの科目も自前教科書で実施することがよいと考えられる。しかし、和服を見たり触れたりした経験にさきわめて乏しい学生の状況を鑑みると、色や質感まで表現した上質なカラー写真が多数掲載されている教材は必須であるため、「自前教科書」にはせずに、この条件を満たす書籍を探して使い続けている。現在この授業は14年目であるが、当初選定した書籍を上回るものがこれまで見つからないため、同じ書籍を使い続けている。この書籍は呉服業界で名高い株式会社鈴乃屋が社員教育に利用していることを偶然知る機会があった。鈴乃屋の教育担当者と筆者とで、和服の基本的な知識を一通り学習するためにほかに適した書籍がないことで意見が一致した。^(注1)

この書籍は現在定価3045円(税抜)である。上記の条件が整っているばかりか、授業で隅から隅まで無駄なく使用している。さらに、卒業後も家に置

いておくことを奨励している。学生だけでなく学生の家族にとっても、和服を着なければならぬ、あるいは趣味等で自ら着るような場面に遭遇した際に、この本さえあれば間違いのないという実に頼りになるものだからだ。ちなみに、エコール資生堂ビューティーアカデミー^(注2)から和服の基礎についての授業を依頼されたときにも筆者はこの書籍を使用し、授業終了後も無駄なく使えるため大切に保管するよう受講者に伝えた。

(2) 映像資料について

教科書に掲載されている映像資料以外にも、できるだけ豊富な実例に履修者が触れることが重要だと考えて、写真や動画などの映像資料を随時収集し、加除や更新を繰り返しながら映像資料を充実させている。

(3) 実物資料について

和服の染の型紙や和服の端切れなどの実物資料を機会がある毎に集め、授業で回覧し、触らせている。端切れは販売すれば安くはない値で売れるように価値あるものであるため、ポケットマネーで買うだけでは費用の負担が大きい。知り合いの呉服屋に依頼しても無償で提供してもらえることは滅多にないが、諦めず機会をみつけては収集するよう努力を続けている。

(4) 展覧会の紹介

一般財団法人伝統的工芸品産業振興協会が運営している伝統工芸館(青山)、シルク博物館(横浜)、伊勢半紅ミュージアム(青山)など、大学所在地の東京都とその近郊に存在する生地や生糸など和服関連の展示がある施設を授業で紹介する。また、たとえば「琉球紅型展」や「有松・鳴海絞展」など、授業に直結した展覧会があれば授業内で紹介し、行くことを強く推奨する。さらに、江戸小紋や東京友禅などの東京の染を代表する産地である新宿区で毎年実施されている「染の小道」のような、和服の生地を見て触れることのできるイベントも、情報を集めて紹介し、行くことを強く奨めている。

(5) 復習シートの導入

和服が身の回りにない学生にとって、授業は毎回、見たことも聞いたこともない言葉や物ばかりがいくつも新たに登場することになる。覚えきれず、混乱し、そのことで学修意欲が落ちるのを防ぐために、これだけは最低限覚えておきたい項目について、頭の整理ができるような形式で「復習シート」を作成し、2013年度から導入している。たとえば全国各地の染のうち代表的なもので、これだけは知っておいてほしいというものだけを取り上げて、一連の文章を作成し、キーワードを空欄にする。全国各地を代表する染の学修が終了した時点で空欄を埋めることを次回の授業までの宿題とする。そして、次の授業で出席確認を兼ねる形で学生1人1人を指示しながら宿題の答えを言わせて、前回の授業内容を復習し、定着を図る。この復習シートの導入は、授業開始時から年を経る毎に授業内容の定着率が低下の一途を辿る学生の状況をどのようにすれば改善できるか考えた結果の工夫であり、効果が上がると同時に、学期末に全学的に実施する学生による授業評価でも利用価値が学生に認められたため、それ以来使用を続けている。

また、復習シートは、単位認定のための筆記試験や「きもの文化検定」模擬問題を解く際に大いに活用されている。さらに、教科書と併用することでこれらの試験の正答率が上がったという学修効果も見られる。

(6) クイズ形式の導入

実物の和服を見たり触れたりする機会がきわめて少ない学生にとって、たとえば道行く人の和服姿を見て、それが何という生地であり、何という染であり、どのような場面にふさわしいものであるのかを言い当てることはたいへん困難である。しかしこれができなければ生きた知識とは言い難い。そこで、写真を見せてそれが何であるかを解答させるクイズ形式を今年度から導入した。全部で20問の白紙の解答用紙を配布して、写真を見せて、「この写真の染

は何か」など、私が発する問いの答えをその場で記入させる。終了後に答え合わせをしながら解説を加え、同時に教科書で確認をする。

(7) 浴衣ファッションショーの導入

浴衣と半幅帯を使って着物を自分で着てたたむ実習を2001年の授業開始当初から実施している。これには2つの目的がある。1つは「衽」や「身八つ口」、「背縫い」など和服特有の構造の名称を生きた知識として身につけることである。もう1つは、後期の動作実習の際に少なくとも浴衣程度は自分で着用し、後片付けも自分でできるようにしていなければ授業がそもそもできないためである。知識を持った上で自ら着用して時間を過ごすことで和服の学修は初めて完成すると筆者は考えている。

しかし、単に浴衣を着てたたむことの繰り返しだけでは学修意欲が低下すると考えて、前期の最終回に浴衣ファッションショーを実施している。ファッションショーの主演(モデル役)は履修者本人である。毎週授業で顔を合わせる履修者どうしであっても、ファッションショーという名がつけばきれいに着用することを意識せざるをえない。それが学修効果を上げ、学修意欲の向上にもつながる。

さらに、夏休み期間は花火大会や夏祭り、音楽イベントなど、学生が浴衣を着て行く場が数多くあるため、この時期に独りできれいに浴衣を着ることができたという体験をしておくことが、授業以外でも浴衣を着用する動機づけにもなる。授業以外の機会に浴衣や和服を着用することは、授業で得た知識が生きた知識になることを促す。

また、学生の立場からすれば、浴衣を着る時期に浴衣実習があることは、浴衣での外出時のトイレや着崩れの際にも役立ち、時期的にちょうどよいと考えられる。

5 工夫の成果

学科のカリキュラムが今年度から刷新されたことから、授業に次のような変更を加えた。これまで和

服の基礎知識はすべて前期で終えて、後期は動作実習がほとんどであった。しかし、ここ数年、全履修者数が十数名から20名程度のうち、和服の基礎知識が身についたと言える学生はわずか1名か2名という状況で、学修効果が低下していることを実感していた。学修効果の測定は、授業中の学生の態度、私の質問に対する学生の反応、筆記試験、きもの文化検定5級模擬問題の答案などから総合的に判断したものである。学生の基礎学力が年々低下することと、この授業での学修効果は相関関係があると思われるが、それを証明するまでには至っていない。しかし、たとえ基礎学力低下を反映しているとしても、授業担当者たるもの学修効果の低下を手をこまめに見ていることは許されない。和服がない環境で生育した者である学生にとって、毎時間初めて聞く単語が多数登場し、それを理解し、さらに覚えなければならない。そうした授業について行くことが困難であると考えられるため、重要なキーワードは何度も繰り返し、教科書に印をつけさせる。さらに復習シートの導入など、さまざまな工夫をこれまで実施してきたが、それでも1つの項目を学修した後1週間、2週間と時間が経つうちにすっかり忘れてしまう学生が少なからず存在する。そこで、カリキュラムの変更を機に授業1時間当たりに覚えなければならない項目を減らすことにした。その結果、講義が後期に残るため、後期は実習科目で実施してきたところを後期も講義科目にして、これまで1セメスターで実施した内容を1.5セメスターで実施する形になった。

こうした形での実施は今年度が初めてであるが、前期を終えた現時点で、筆記試験の成績が明らかに向上した。25問出題し、1問4点で実施した結果、受験者数27名^(注3)中100点1名、90点台6名、80点台4名、これら高得点者だけで11名、40%という結果であった。詳細な分布は図1の通りである。

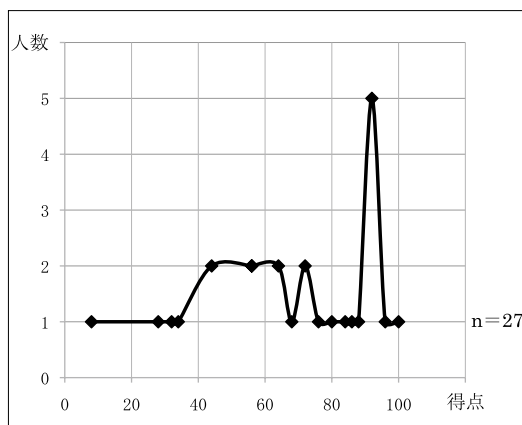


図1 2015年度和装文化論I試験の得点分布

試験の答案と成績をつけるための資料は、個人情報漏洩問題が起きぬための大学の制度を利用して次のセメスターに適切に処分しているため、過去の成績分布は残念ながらここに提示することができない。従って昨年度までとの比較は客観的にはできない。また、その年の時間割により履修者数が大きく左右されるため^(注4)、母集団の増減が激しいことも、これまでの状況との比較を困難にしている。しかし履修者数はこれまで10名を下回ったことはなく、実習指導の限界から上限は30名とし、上限についてはシラバスに明記し、初回授業でも説明し、必要があれば調整を図っているため、これまでの最大は32名であった。そうした中で実施した試験結果は、あくまで筆者の記憶の範囲内ではあるが、例年同じ水準の問題で試験を実施して、ここ数年の間80点以上獲得する者は2名程度で、年によっては皆無ということもあったことから、今回の工夫により学修効果が上がったと考えられる。

6 今後の課題

今後も和服を見たり触れたりすることがほとんどなくこの授業を履修する学生が続くことが見込まれるため、学修内容の定着を図る工夫は継続しなければならない。2013年度に中国人留学生が前期と後期を通じてこの授業を履修したように、日本文化に

対する海外からの関心が高まっている現状を考えると、今後も留学生が履修する可能性は大いに考えられる。留学生は日本語能力も十分で、日本文化に対する関心が高いとはいえ、日本人の学生と同様、和服を見たり触れたりする経験がほとんどなく、初めての事柄ばかりがたくさん詰まった授業であることが想定される。日本人学生に対しても、留学生に対しても、どちらも同じように未知の初めての事柄が満載の授業であることを前提に、理解を促進する工夫は今後も怠ってはならない。また、学生の様子を細かく観察しながら臨機応変に工夫を加えることは今後も続けて行かねばならないと考えている。

注

- 1 教科書として使用しているものは次の書籍である。『新版きものに強くなる』家庭画報社,2001年初版
- 2 株式会社資生堂の社員のうち、店頭でカウンセリングと販売をする職種をビューティーコンサルタントと言う。この論文の執筆時点で全国に約1万2千人いるビューティーコンサルタントの中から特別に選ばれた者が3年間特別な教育を受け、一定の能力がついたと認められることで資生堂ビューティースペシャリストになることができる。それゆえ、資生堂ビューティースペシャリストは美容の専門家の中の専門家という存在で、資生堂式美容法を世間に伝えることが主とした任務である。この資生堂ビューティースペシャリストを育成するために資生堂社内に設けられた教育機関の名称が、エコール資生堂ビューティーアカデミーである。ここで研修中の者はアカデミー生と呼ばれている。2010年4月の発足から2015年4月までの間に誕生した資生堂ビューティースペシャリストはわずか16名で、この論文執筆時点の2015年8月時点のアカデミー生は8名である。
- 3 今期は履修希望者が60名を超えていたため注

3の方法で履修者を絞り、33名に履修許可を出した。しかし、途中で授業を放棄する者があり、最終的に残ったのは27名であった。授業を履修できない多数の学生のことを考えて、固い履修の意志を1人1人確認してから履修許可を出したにもかかわらずのことなので、残念でならない。浴衣の着付けを目的に安易に履修する学生が毎年数名はいるため、難しい授業であることを最初に強調している。この問題の解決も今後の課題である。

- 4 たたとえば必修科目の「裏番組」になると大幅に履修者が減るが、裏番組に必修科目がまったくなく学科の選択科目もわずかという年度は履修希望者が大量に来て選別を行わなければならない場合がある。シラバス(文末の資料参照)にはこうした場合の選別方法を明記し、初回授業でも丁寧に説明している。具体的には、授業担当者(筆者)の専門ゼミに所属する者が最優先、次が学科専門科目であることから人間関係学科の学生、その次が卒業単位を揃えるために4年生、それでも余裕があればその他というものである。

資料 2015年度シラバス

科目名称	和装文化論I/服装と文化/服装と文化I
担当教員	石田 かおり 「きれいを学問する」という大テーマの下、出席者が自分自身の「きれい」を考え創造する際の視点獲得をめざして、教養と身体技法を身に付け授業のテーマ・るための授業を実践的に進める。
目標	日本人の伝統的な衣服である和服を取り上げ、現在の日常的な衣服としての洋服と比較しながら服装と文

化の関わりを考える。具体的には、和服の基礎知識と日本人の伝統的な美的感覚について、主として講義形式で学ぶ。「きもの文化検定」5級合格をめざした内容である。

授業内容と課題学習(予習・復習)

- 第1回 予習: 和服についての自分の知識の整理
授業: 受講者の抽選・授業の進め方と諸注意(プリント)・和服アンケート
復習: 配布プリントとノートの再読
- 第2回 予習: 「化粧の文化史III」履修者はその内容の復習
授業: 生活様式と生活意識について・日本服飾史(プリント等の資料)
復習: 配布プリントとノートの再読
- 第3回 予習: 今までに知っている着物の種類を洗い出す
授業: 着物の種類とTPO(教科書頁8~27,41~61)
復習: 教科書頁8~27,41~61の講読とノートの再読
- 第4回 予習: 日本の染物について知っていることを洗い出す
授業: 染の着物(手描き友禅)(教科書頁64~77)
復習: 教科書頁64~77の講読とノートの再読
- 第5回 予習: 家の中の染物が何かを調べる
授業: 染の着物(型染め)(教科書頁78~93)・紋と刺繍(教科書頁26,27,90~93)
復習: 教科書頁78~93,26,27,90~93の講読とノートの再読
- 第6回 予習: 日本伝統の色の名で知っているものを洗い出す,色彩検定受験勉強経験者は伝統色名を復習する

授業：染の着物(伝統色・柄)(教科書
 頁29～39)
 復習：教科書29～39と講義ノートの再読
 第7回 予習：家の中の織物が何かを調べる
 授業：織の着物(二大袖)(教科書頁96
 ～99)
 復習：教科書頁96～99と講義ノートの再
 読
 第8回 予習：家の中の織物が何かを調べる
 授業：織の着物(その他の袖・木綿・麻な
 ど)(教科書頁100～115)
 復習：教科書頁100～115とノートの再読
 第9回 予習：家にある着物や街で見かけた着物
 の種類・染・織・伝統色名・紋など
 が何か考える
 授業：着物の種類を見分ける
 復習：ここまでの授業を思い出して家にあ
 る着物や街で見かけた着物の染・
 織・伝統色名・紋などを当てる
 第10回 予習：学校の制服の衣替えがいつか思
 い出す、洋服の季節による着分けの
 実態を洗い出す
 授業：季節や天候・TPOに応じた着物
 (教科書頁147～168)
 復習：教科書頁147～168の講読とノート
 の再読
 第11回 予習：これまでの授業の復習(わからない
 箇所のないよう)
 授業：授業理解度調査
 復習：わからなかった問題と解答に自信
 のなかった問題の正解を調べる
 第12回 予習：浴衣実習のために必要なもの準
 備
 授業：浴衣を着る・たたむ(教科書頁264
 ～265,273)

復習：浴衣を着る・たたむを1人でできるよ
 う復習する、返却された答案の不
 正解箇所の正解の復習
 第13回 予習：浴衣実習のために必要なもの準
 備
 授業：浴衣を着る・たたむ、帯結び(教科
 書頁264～265,273)
 復習：浴衣を着る・たたむ、帯結びを1人で
 できるよう復習する
 第14回 予習：浴衣実習のために必要なもの準
 備
 授業：浴衣を着る・たたむ、帯結び、着崩れ
 の対処と立居振舞の基本(教科書
 頁287)
 復習：浴衣を着る・たたむ、帯結び、着崩れ
 の対処と立居振舞の復習
 第15回 予習：浴衣ファッションショーのためのコー
 ディネートを考え、必要なものを準
 備する
 授業：浴衣ファッションショー
 復習：浴衣を着る・たたむ、帯結び、着崩れ
 の対処と立居振舞の復習
 テキスト・教材 『新版きものに強くなる』世界文化
 社、2001年
 参考書 全日本きもの振興会『きもの基本』
 アシエット婦人画報社(きもの文化
 検定4・5級公式教本)、河上繁樹・
 藤井健三『織りと染めの歴史—日
 本編』昭和堂、馬場まみ監修『着
 物の大研究』PHP研究所
 評価の基準と 出席を前提とし、課題70点、授業
 方法 態度30点で評価する。
 欠席回数が全授業回数の3分の1
 を超える場合は単位を認定できな
 い。

学習方針

該当水準(0:当てはまらない, 1:やや当てはまる, 2:当てはまる, 3:よく当てはまる, 4:非常によく当てはまる)

A	総合的教養力(知力)	3
a1	探求と分析力	2
a2	批判的思考力	1
a3	創造的思考力	2
a4	理解と読解力	4
B	総合的技術力(技能)	2
b1	言語運用力	1
b2	創造的技術	2
b3	量的分析リテラシー	0
b4	情報リテラシー	0
C	豊かな人間性(感性)	2
c1	チームワーク	2
c2	問題解決力	1
c3	倫理的思考力	0
c4	市民としての知識と責務	2

授業開始前 服飾史の部分は化粧の文化史I・IIを学習 履修しておくことと授業の理解が深まる

関連科目 化粧の文化史I・II,身体文化実習II,身体文化ゼミ,ライフデザインゼミC

その他 ●履修は浴衣一式が準備(購入等)できる者に限る。また、浴衣実習時の忘れ物は欠席とみなす。
●個別指導の限界上、履修者数の制限がありうる(20～30名程度)。ライフデザインゼミCおよび身体文化ゼミ履修者→他のライフデザインゼミ履修者→人間関係学科→他学科の順に優先する。
●初めて見聞きする言葉や事柄ばかりの授業になるため、脱落しないよう、欠席だけでなく、集中力にも留意して履修する必要がある。
●授業内容の確実な定着を図るため「きもの文化検定」5級の受験を推

奨する(授業での申込はしない)。

科目名称 ☆和装文化論II/服装と文化実習/服装と文化II

担当教員 石田 かおり

授業のテーマ「きれいを学問する」の大テーマのマ・目標 下、出席者が自分自身の「きれい」を考え創造する際の視点獲得をめざして、教養と身体技法を身に付けるための授業を実践的に進める。
前期の授業内容を踏まえた上で、和服着用時の美しい身体技法と洋服着用時の美しい身体技法の異同を体験する動作実習型の授業。日常の動作のほかに美を強く意識しなければならぬ日本舞踊を体験することで、美しい身体技法を頭と体を使って考える。

前授業内容と課題学習(予習・復習)

- 第1回 予習: 帯について持っている知識の洗い出し,家にどんな帯があるか調べる
授業: 帯について・着物の構造(教科書頁117～145,238～239)
復習: 教科書頁117～145,238～239の講読とノートの再読, 家にある帯が何かを確認する
- 第2回 予習: 洋服のコート・ジャケット・羽織物にどのようなものがあるか整理する
授業: コートと羽織(教科書頁164～168)
復習: 教科書頁164～168と講義ノートの再読,街で見かける和装コート・羽織の種類を確認
- 第3回 予習: 和装小物・履物にどのようなものがあるか調べる

	<p>授業：和装小物・履物・下着について(教科書頁169～236)</p> <p>復習：復習:教科書頁169～236の講読とノートの再読・街で見かける和装小物・履物の種類を確認する</p>		
第4回	<p>予習：前期を含めたこれまでの授業の復習をする</p> <p>授業：きもの文化検定5級模擬問題にチャレンジ</p> <p>復習：できなかった箇所の復習をする</p>		
第5回	<p>予習：どんな人間になりたいか、どんな女性になりたいか、日ごろの考えをまとめる</p> <p>授業：授業履修上の注意事項、自身の「きれい」の目標設定</p> <p>復習：授業で設定した目標を忘れぬよう何度も思い返す</p>		
第6回	<p>予習：予習:前期に習った浴衣の着方・たたみ方・帯結びの復習</p> <p>授業：浴衣を着る復習、動作実習:立つ・坐る・お辞儀</p> <p>復習：授業で習った動作を家で何度も実施してみる</p>		
第7回	<p>予習：前回の内容の確認</p> <p>授業：動作実習(お辞儀の復習、歩く・階段・車の乗り降り・訪問と贈答)</p> <p>復習：授業で習った動作を家で何度も実施してみる</p>		
第8回	<p>予習：テレビ等で歌舞伎舞踊を見る</p> <p>授業：動作実習(日本舞踊を取り入れた身体技法の比較)</p> <p>復習：授業で習った動作を家で何度も実施してみる</p>		
第9回	<p>予習：テレビ等で日本舞踊を見る</p> <p>授業：動作実習(日本舞踊を取り入れた身体技法の比較)</p> <p>復習：授業で習った動作を家で実施して</p>		
			みる
第10回	<p>予習：前回の内容の確認</p> <p>授業：動作実習(日本舞踊を取り入れた身体技法の比較)</p> <p>復習：授業で習った動作を家で何度も実施してみる</p>		
第11回	<p>予習：前回の内容の確認</p> <p>授業：動作実習(日本舞踊を取り入れた身体技法の比較)</p> <p>復習：授業で習った動作を家で何度も実施してみる</p>		
第12回	<p>予習：前回の内容の確認</p> <p>授業：動作実習(日本舞踊を取り入れた身体技法の比較)</p> <p>復習：授業で習った動作を家で何度も実施してみる</p>		
第13回	<p>予習：第8～12回の内容の確認・復習</p> <p>授業：第5回で立てた目標としての身体表現の発表</p> <p>復習：発表の自己反省</p>		
第14回	<p>予習：第8～13回の内容の確認・復習</p> <p>授業：動作実習(洋装での動作比較)</p> <p>復習：授業内容を踏まえて洋装と和装の動作の異同を整理する</p>		
第15回	<p>予習：予習:後期の講義や授業で受けた説明の復習</p> <p>授業：まとめの講義・第5～14回のフィードバック・自己評価・授業理解度調査</p> <p>復習：自己評価内容を確認し、今後の自分の美の追求の方向性や方法について改めて計画・実践する</p>		
		テキスト・教材	『新版きものに強くなる』世界文化社(前期と同じ教科書)
		参考書	小笠原敬承斎『図解 美しいふるまい』、淡交社、2001年 市川春猿『女作り』、徳間書店、

2006年、ほか必要に応じて指示と回覧をする

評価の基準と方法 出席を前提とし、授業に対する参加の積極性70点、課題や提出物30点で評価。欠席回数が全授業回数の3分の1を超える場合は単位を認定できない。また、とくに欠席してはいけない時間がある場合は授業内で案内する。

学習指針

該当水準(0:当てはまらない, 1:やや当てはまる, 2:当てはまる, 3:よく当てはまる, 4:非常によく当てはまる)

A 総合的教養力(知力)	4
a1 探求と分析力	3
a2 批判的思考力	4
a3 創造的思考力	4
a4 理解と読解力	1
B 総合的技術力(技能)	4
b1 言語運用力	1
b2 創造的技術	4
b3 量的分析リテラシー	0
b4 情報リテラシー	0
C 豊かな人間性(感性)	4
c1 チームワーク	0
c2 問題解決力	3
c3 倫理的思考力	0
c4 市民としての知識と責務	0

授業開始前 和装文化論Iまたは服装と文化Iの学習 単位取得が前提の授業

化粧の文化史IIを履修しておくこと授業の理解が深まる

関連科目 身体文化実習I・II,身体文化ゼミ, ライフデザインゼミC

その他

●和装文化論Iまたは服装と文化Iの単位取得者のみが履修できる(前期を習得していないとまったく理解できない内容であるため)。

●授業内容の確実な定着を図るために「きもの文化検定」5級の受験を推奨する(授業での申込はしない)。

●実習は1度の欠席でも授業について行くことが難しくなるため、欠席は望ましくない。また、教員の動作を細部にわたるまでよく観察しひたむきに真似、全身の感覚を総動員して姿勢や手の位置などの体性感覚に留意する必要がある。自発的に繰り返し動いて実施してみることが求められる。